



コルネリオ会

(防衛関係キリスト者の会)

ニュースレター No. 125

2010年12月



2010軍人キリスト者会東アジア大会を終えて

コルネリオ会会長 今市 宗雄

本大会は、振返ると全て御手の中であって、主からの恵みの連続であったことを覚えさせられる。

事の始まりは、台湾での2007アジア大会時に日本担当の予定が告げられ、翌早朝からベッドで三人の兄弟との相談も過熱して隣室から壁を叩かれた程であった。帰路は、成田空港から真っ先に本大会を実施することになるマロウドホテルへ直行し、規模に応じる見積りを依頼した。このホテルは、予ねてホーリネス千葉県聖会で毎年世話になっていた。大会開催の日本受託は、韓国から70名と台湾から40名の参加を前提として、2ヶ月後に決定してAMCF本部へ報告した。

しかしながら、間もなく参加者が所期に満たない懸念が海外からも漂い始めた。その理由は、予定会場が東京から遠く離れていることと各国とも不況の最中にあることであった。

そこで対案として、国立オリンピック記念青少年総合センター（代々木）を追求し、いよいよ申し込み開始直前の2009年10月末を迎えた。一方、このころ平行して課題にされていたのが、中央アジアからの会員の招聘についてであった。こうした中で時を同じくして重要会議が、同センターで持たれる運びとなった。参集者は、AMCF側からリー東アジア会長、ACCTSのリックさんとコルネリオ会役員である。本会議での決定事項は、大会会場をマロウドホテル成田とすることと中央アジア招聘に伴う関係各国間の責任分担が明確にされた。この時が、準備に当たってのターニングポイントであり且つ再出発点にもなり大きな弾みが与えられた。

次なる恵みは、有力な奉仕者が与えられたことである。私と妻は、この春に牛久市の恵泉キリスト教会みどり野チャペルに転教会をしていた。そこでの間も多くのプレゼントは、主任牧師が大会の講師へ、続いて奏楽の姉妹、韓国語・中国語・英語の同時通訳の宣教師と兄弟が次々と与えられた。また、主任牧師の大喜多正洋師は、大会計画の当初から総司会を御願いし且つ私に洗礼を授けて下さった尾山謙仁牧師と親友でもあられた。

こうして段取りが逐次整えられて行く中でも、2010年度コルネリオ会活動計画では参加者が所期に満たない場合は大会中止をも明示し、祈りつつのひた向きの調整作業が続けられた。

こうした時、準備間の最終カンフルは大口献金と石川兄の大会手引書等の献身的な作成であった。この作業の調整間にシュミレーションが十分なされ数少ない基幹要員の総力が一定方向に集中できたことは大変感謝なことであった。

実施間は、各所掌に委ねまた助け合い、そして参加者の霊性が日々盛り上がりを見せ主の栄光を仰ぎ見る恵みの時となった。特に、開催間の自衛隊宣教会の働きには活力を与えられた。

喜びと感謝に溢れた兄弟・姉妹方の姿が、今でも眼に浮かぶ……。

いよいよ、この恵みによって強くなった（テモテⅡ2：1）
沖へ漕ぎ出す重荷を感じる今日である。

2010 軍人キリスト者会東アジア大会成果報告

会員 圓林 栄喜

1 はじめに

2010年9月2日（木）から4日（土）までの間、マロウドインターナショナルホテル成田にて実施された2010年軍人キリスト者会東アジア大会は盛会のうちに終了しました。

大会は特段のトラブルもなく、また時間の大幅な遅れもなく整齊と進行することができました。参加者全員が主の前に終始謙遜かつ協力的であったことに他ならないと思います。

また、開催準備間そして開催間多くの兄弟姉妹からの尊い祈り、支援、献金をいただいたおかげであり心から感謝申しあげます。今回の大会成果を主要なプログラムから省みたいと思います。

2 参加者数

国名	参加者数	国名	参加者数
日本	55	米国	4
韓国	33	台湾	17
モンゴル	2	中国	1
キルギスタン	1	カザフスタン	2

8カ国 参加者総計 115名

今回、初めてキルギスタンとカザフスタンから参加があったが、世界会長と東アジア会長が中央アジア会員の招聘に留意されていたことを付記しておく。

3 礼拝・講演

開会礼拝 大喜多正洋 牧師

聖書講演 山北宣久 牧師

派遣礼拝 徳梅陽介 牧師

それぞれの牧師から、大会テーマ「沖へ出でよ」に係るメッセージをいただいた。（聖書講演のメッセージ要約を掲載）

講師の方々の尊い奉仕に感謝申しあげる。

特に、山北宣久牧師からは AMCF 会員はパウロ同様に他のために血を流す人であるとの励ましを受けた。

4 各国報告

日本、韓国、台湾、中国、モンゴル、キルギスタン、

カザフスタンの各国と韓国人留学生を中心に日本で活動しているテモテ会がそれぞれの国の軍人キリスト者、クリスチャンの活動状況等を報告した。

キルギスタン、カザフスタンの兄弟によるロシア語のアメイジング・グレイスは印象的で素晴らしかった。

また、中国牧師の証しを通して、中国でのリバイバルが興りつつある様子を知ることができた。

5 歓迎夕食会

各国を歓迎し夕食会を実施した。その際、長橋晴子姉、今井潤子姉によるピアノとファゴットの特別賛美が演奏され参加者皆癒された。その後、全員で写真撮影を実施した。

6 グループ討議

「沖へ出でよ」ルカ5：4をテーマに任務・仕事、家庭生活、福音伝道の3グループに別れ、それぞれのグループごとに互いに体験談を証し合い、リーダーの選定した代表者が証を実施した。それぞれの証に参加者一同励まされた。

グループリーダー

参加国	軍人 (自衛官)	家族	一般 (牧師)
韓国	1 Oh, Hyung Jae 2 KANG, Duk Dong	1 Hur, Seung Hwa	下桑谷浩
台湾	3 Mo Te Cheng	2 Chu Hsu Ta	
モンゴル	4 中野久永 5 リチャード ライレス	3 メリッサ ライレス	
中央アジア			
アメリカ			
日本			

発表者

国名	発表者	内容
カザフスタン	Kondratyev Viktor	任務・仕事
キルギスタン	Nuraly Niazbaev	
モンゴル	Lkhagra Bayarbileg	
台湾	Chu Hsu TA	
中国	Chen Yousong	宣教
韓国	Yoon, Jae Myoung	任務・仕事
	Hwang, In Kew	
	Ha, Jeom Le	家庭生活

7 見学会

参加者はつくば宇宙センターとクリスタルガラスの見学グループに分かれて見学会を実施し、その後つくばイオンショッピングセンターで買物・夕食を楽しんだ。

8 自衛隊宣教会

2夜にわたり、自衛隊宣教会による特別賛美、証、メッセージが行なわれた。自衛隊宣教会が精一杯の奉仕をして下さった。

講師をはじめ奉仕して下さった兄弟姉妹に感謝申しあげる。

特別賛美 マハナイム賛美チーム

2日(木) 朴 昌允 牧師

3日(金) 深谷春男 牧師

9 証

矢田部稔・和子夫妻、下桑谷宣教師からそれぞれコルネリオ会にまつわる証、ブラジル宣教にまつわる証をいただき、長年にわたり奉仕献身された矢田部夫妻と下桑谷宣教師の歩みを辿ることができた。

10 閉会式

矢田部稔コルネリオ会名誉会長、下桑谷ブラジル宣教師に対し AMCF 会長から感謝状が贈呈された。

また、今後の東アジア地区の AMCF の大会等の予定について AMCF 東アジア会長からアナウンスがあった。

年	内容	開催国
2011	Interaction	モンゴル
2012	Interaction	台湾
2013	東アジア大会	韓国
2014	世界大会	
2015	Interaction	日本
2016	東アジア大会	台湾

2017	Interaction	モンゴル
2018	Interaction	韓国
2019	東アジア大会	日本

11 送別昼食会・見送り・ホームステイ

送別昼食会を実施した。石川信隆コルネリオ会前会長が送別の挨拶を実施し、昼食会の後、満面の笑みで帰国につく友の姿を見送り、アジア大会の全プログラムを終了した。

その後、キリギスタン、カザフスタンの兄弟の国内観光等は在京の ACCTS 会員 Rick 夫妻がホーム・ステイを含めて対応していただいた。

12 会計報告

1 収入	一般会計から繰越	¥1,853,650
	参加費(注1)	¥2,103,240
	東アジア大会への献金(注2)	¥377,890
	合計	¥4,334,780
2 支出	ホテルへの支払(注3)	¥2,474,050
	講師謝礼・奉仕者謝礼(注4)	¥620,000
	中央アジア参加国旅費	¥146,860
	中央アジア参加国接遇	¥100,000
	事務通信費(注5)	¥312,100
	茶菓代	¥596
	一般会計へ繰入れ	¥681,174
	合計	¥4,334,780

注1：金額に端数があるのは郵便振込払いの場合手数料が引かれているため

注2：東アジア指定献金、東アジア大会時の席上献金を含む

注3：宿泊代等¥1,359,400、会食代等¥1,114,650の合計

注4：講師3人、奉仕者6人及び自衛隊宣教会講師分

注5：通信機レンタル料、通訳機返送料、名札代、印刷代、額縁代等

13 その他

コルネリオ会役員9名が夫々の務めを果たせたこと、各講師そして司会・賛美・奏楽・通訳を与えて頂いたことを改めて神に感謝する。

さらに、ホテル担当者の積極的な協力があったことも付記しておく。

沖へ出でよ！（要約）

この会場に来て主にある同志であることを実感する。戦友は絆が最も強い。AMCFの人々は主にある信頼と絆を実感できるのだと思う。イエス・キリストは三流の人であった。私達のために涙を流し、汗を流し、血を流して下さる。パウロの生涯もそうであった。AMCFの方々は命をかけて他人を守り、血も流す方々

山北宣久牧師（日本基督教団総会議長）

でもある。

漁師シモンは夕方から働き出して一晩中働いて漁をし、朝を迎えるのを常としていた。しかしその朝は、夜昼取り違えた健闘も虚しく、魚一匹網にかからない。徒労とシラケた思いが疲労感を増すばかり。朝が明け染めようとしているのに、光に背を向けて空しい夜の

業の後始末をしていた。

そのシモンに主イエスが近づいて舟を貸してくれという。押し寄せた群衆を裁き切れず、舟を説教壇にして人々に語るためであった。

「こっちは疲れているんだヨ、早く帰って眠りたいんだ。もういい加減終えてくれないかナー。」

話がようやく終り人波も引き、ヤレヤレと思っているところに、イエスのとんでもない言葉が飛び込んできた。「沖へ漕ぎ出し、網をおろして漁をしてみなさい」

「オイオイ何言っているんだ、私たちは漁師なの、いくら偉い先生とは言え大工の子に漁のことは分かるはずないでしょ。大体こんなに明るくなって魚が底に沈んでしまっている。餌のある浅瀬ならともかく沖へ出て網をおろせなんていうこと自体無知をさらけ出している。付き合っていられないぜ」という思いは想像に難くない。

ところが、イエスの言葉には何か従わざるを得ないものがあつた。朝になってから沖へ漕ぎ出すのは無駄、無意味、徒勞であることを良く知っているシモンであった。しかしそうしたシモンに迫ってくる圧倒的な主イエスの言葉に彼は応答して言った。「先生、私たちは夜通し働きましたが何も取れませんでした。しかし、お言葉ですから網をおろしてみましよう。」

夜通し働きましたが、何も取れませんでした。何をやっても無駄です。少なくとも今日はダメです。無駄に、無益に、無意味、無理、無謀、無軌道というもの。というところをシモンは「しかし、お言葉ですから網をおろしてみましよう。」と大いなる<しかし>を発したのである。

この<しかし>は、自分の経験を絶対とする生き方から離れることを意味した。経験それは尊いものではある。しかし、この経験を絶対化し、振り回すとなると自分に対しては自信過剰となり、人に対しては押し付けがましく過干渉になりやすい。「人それぞれなのに自分の経験からして絶対に～だからやっごらん」などと強制する。そして「無理させて無理をするなど無理をいう」ということになりかねない。

作家サマセット・モームは面白い言い方をした。「私には確信の持てることが一つだけある。それは人が確

信を持てることなど本当に少ないということだ。」確信を持てることなど本当に少ないということだけは確信を持って言えるというのだが、そうだろうと思う。

人間は不確かさの中を求めつつ生きるのだ。しかし、自分の経験や知識、判断を確実なものとして行動していくうちに観念が硬直し、新鮮な見方ができず、感謝や喜びを味わえなくなっていく。

ペテロは、「夜通し働きましたが、何も取れませんでした。」と言って自分の経験に照らして今日はダメだと訴えている。「しかし、お言葉ですから網をおろしてみましよう」といって自分の経験より主の言葉を優先させた。

<しかし、お言葉ですから>これは、方向転換を示す言葉である。

今まで私は、私の知見、私の経験、私の計画、そうしたものの上に立ってきました。しかし、今はそれをやめてあなたのお言葉の上へと立つところを変えてみます、という意味である。

夜通し働いたのに、一匹の魚も取れず疲れ切って網を洗っている。考えてみれば、これは人生の縮図ではないのか。一生懸命やっても実を結ばず、苦勞は徒勞と疲勞のみを生み、報われることがない。希望は失望に、願望は絶望へと変わっていく。それが人間の現実ではないかと思う。

しかし、そこにこそ主イエスは近づき「沖へ漕ぎだし網をおろして漁をしてみなさい」と言われる。徒勞を越えて新しい歩みを今一度踏み行かせようとされる。人間の徒勞、虚無、そこにみ言葉が切り込んでくる。この切り込んでくる主の言葉の上に立つともう一度挑戦してみようとする決断と冒険、それが信仰である。

「沖へ漕ぎ出せ」これまた象徴的な言葉である。他の福音書では「深みへ乗り出せ」となっている。沖、深み、それは危険な場所である。浅瀬と違って自分の足で立つことができない。今までの経験、さらには自分の惨めさと無力を知らされる所、それまでの自分の歩みをもう一度顧み、問い直させられる場所として、沖へ漕ぎだし、深みに乗り出す。シモンはそこでこそイエスと出会い、自分を再発見させられる。

「しかし、お言葉ですから網をおろしてみましよう」主イエスの言葉の上に立った時、シモンは主客転倒を

経験した。主であると思っていた自分、客であると思っていたイエスが入れ替わる。まさに主客転倒が起こる。その時、シモンはイエスをもう「先生」とは言わなかった。「主よ」と告白する。イエスに捉えられた逃げ隠れできない自分を再発見させられる。

徒勞に終わるかに見える人生、無駄に窮まるかに思える人間のわざ、それを主イエスが十字架と復活の恵みをもたらして下さる。獲れたのは魚ではなくシモン自身であった。

徒勞の現実の中でこそ、み言葉により鍛えられ、自分を再発見されつつ新しい現実へと導かれていく。私たちを赦し、執り成し、再創造したもう十字架と復活の確かさにあって、第1コリント15章ではこう勧める。「だから愛する兄弟たちよ。堅く立って動かされず、いつも全力を注いで主のわざに励みなさい。主にあってはあなた方の労苦がムダになることはない」とあなた方は知っているからである。」

この世は無駄なく、無理なく、ムラなく物事をやり最大の効率を上げることを旨とする。シモンはそんなことやっても無駄だ、もう一度網をおろすなんて徒勞

に終わるに決まっているという思いがひっくり返されて主イエスに出会った。以来、効率第一でなく、無駄とも思えることを主のために平気でやれる人間になっていく。徒勞を越えて逞しく生きる者とされる。それは主にあっては労苦がムダになることはないということを知らされたからであろう。

最後に一つのことに触れて終ろう。沢山の魚が獲れたので、「もう一艘の舟にいた仲間に加勢に来るように合図をした」という言葉である。

英語では、He motioned to his partner となっている。合図は motion とされている。Motion は言葉の違い、人種の違いを越えて伝わる。

今日の世界に欠けているのは、この合図である。心と心を結ぶ合図、恵みと喜びを分かち合うとする Motion、これが足りない。「でもお言葉ですから」と言って、徒勞を越えて沖へ漕ぎだし、恵みに与り、それを分かち合う合図 Motion を発していく、私たちに求められている一点を深く示される。

EA 軍人クリスチャン大会に参加して

宮崎健男牧師

各国の国防に携わっている方々の中から、主が永遠の御国の建設の為に召しだされた方々が、階級組織の中にあっても、その階級を超えて、仕え合う美しさ、軍人らしい時間の正確さと、集会の密度の濃さ、各国が身につけている生活習慣の機敏さなどを感じ取り、流石だと思われました。

各国報告の中では、特に韓国の軍人クリスチャンたちが、国民の総福音化のために軍隊内で目標を定めて、計画的に祈り、集会活動を組織し、実践している報告を聞いて、正に、主と共にある軍隊だなと驚嘆しました。

本大会において、世界や、東アジアの組織の長をお招きでき、そのビジョンを共有すると共に、モンゴルや初めてカザフスタンやキルギスタンの軍関係者の方々をお招きでき、お交わりのうちによき研修ができたことは、彼らにとって大きなチャレンジであり、今後の発展への第一歩だと信じます。

またクリスチャンとして定評のある台湾と共に中国の地下教会の現状を報告された方もあり、今後の発展が注目されます。

日本のコルネリオ会が、少数精鋭で一丸となって、このような大会の開催に貢献された労苦は如何ばかりだったかと推察します。主が豊かにお報い下さいますように。国際社会にあって、真のリーダーシップを見失いつつある祖国日本にあって、今は少人数とはいえ、日本のコルネリオ会の中にあって、今日まで主の御前に忠実に主に仕えてこられた諸先輩と共に、主が加えておられる若い世代の諸兄弟たちが主の大庭でますます用いられますようにお祈りいたします。

(編集子)

今回の大会において様々な形で支援して下さった皆様に改めて感謝申し上げます。引き続き防衛関係キリスト者が主にある証をしつつ歩めるようお祈りをお願い申し上げます。

東アジア大会開催状況



2010軍人キリスト者会東アジア大会（集合写真）



各国報告（カザフスタン）



アジア大会会場風景



歓迎夕食会特別賛美（長橋姉、今井姉）



証（矢田部稔 コルネリオ会名誉会長）



宣教会特別賛美（マハナイム賛美チーム）



感謝状贈呈式（下桑谷 ブラジル宣教師）